

東北農業経済学会 Newsletter 2016 秋号

◇◇ 記事一覧 ◇◇

新会長就任あいさつ	1
第52回青森大会報告	1
役員会・総会報告	2
2015/16年度学会賞	3
受賞者のことば	4
学会長を退任するにあたっての所感	4
論文投稿のご案内	5
会員のよこが	6

新会長就任あいさつ

新たな50年に向けて歩を進める一助になれば

東北農業経済学会長
小沢 互（山形大学）

平成元年に入会し、28年目になります。この間、報告へのコメントや懇親会でのアドバイス、大会運営へのアドバイスなど学会員の諸先輩から大変暖かいご支援を頂いて、少しは成長できたかなと思っています。全国的に学会のあり方について議論が活発になっていたとき、ご多分に漏れず当学会も事務局体制のあり方、学会誌のあり方について体制整備が求められました。学会をリードされた優れた大学関係の諸先輩は当然のごとく大学執行部となり、また他出され、私が編集担当常務理事を承ったのは10数年前です。関係学会の学会誌と同等の評価を目指して、研究論文による学会誌の充実に関わり副会長までさせて頂きました。学会員の皆様のご協力もあり、大会では個別報告が20数報告あり、掲載論文は毎年10数本あります。農業経営経済系の他学会に引けを取らない学会誌となり、研究面で本会も十分な評価を得るまでになりました。

しかし、「東北農業をいかにして発展させるか」という実践的課題を学会員間で共有していることは50年前の設立時から変わっていないのですが、農家や農業生産組織関係者、東北農政局や各県農政担当者、普及職員、

農協等農業団体職員、ジャーナリストの参加は年々減少しています。彼らとの学会員の関わりが減少したわけではなく、多くの学会員が農家や農業生産組織関係者の相談や支援に関わり、東北農政局や各県農政に関わりを持ち、普及職員、農協等農業団体職員と関係性を持ち、ジャーナリズムとの関わりを持っており、その関係性は以前よりもより多様にかつ複雑になってきていると思います。

また農林水産省による米の生産数量目標情報提供の廃止、TPP批准に関する国会審議はもとより、農業就業者の現状、農山村地域の現状を見れば、本会の果たす役割はこれまで以上に重要であり、決して研究者だけでこれらに対応できるわけではありません。

このような現状をみると、当初の目的に立ち返って改めて農家や農業生産組織関係者、東北農政局や各県農政担当者、普及職員、農協等農業団体職員、ジャーナリストの皆さんに本会に参加頂けるような取り組みが求められます。

会員の皆様はもとより、有能な理事、評議員の皆さんに見守って頂きながら、ベテラン揃いの常務理事会が中心となって、これから2年間、少しでも多様な会員が増えるように活動をさせて頂きたいと考えます。

会員各位のご協力ご支援を頂ければ幸いです。

第52回 青森大会報告

2016年8月26日、27日に、弘前大学農学生命科学部を会場として、第52回大会（弘前大会）が開催されました。初日の大会シンポジウムは「TPP大筋合意と農業者・消費者の対応」を共通論題として、会員である研究者に加え、行政と生産・消費の現場からの実践に基づいた報告がなされました。冒頭に東山会員からTPP大筋合意に解説頂き、行政（榊真一氏（弘前市））と生産者（渡部一男氏（樽見内営農組合）、境谷一智氏（豊心ファーム））、消費者（齋藤清治氏（みやぎ生協））による4報告の後、研究者によるコメント（成田会員、中村会員、吉仲会員、冬木会員）という構成で進められ、多くの論点が提示されました。総合討論では、座長である鶴川会員、石塚両名による司会進行で参加者から提出

された質問票を中心に「食品表示のルール変更による国内市場における品質面での競争力低下への懸念」「輸入果実が増加する可能性と国産生果・果汁への影響の有無」「国産米を輸出する際に要するコストやメリット」「中間層が切り崩されている情勢下で、いかにして自覚的消費者を育成するべきか」等の生産・流通・消費と内容が広範囲に渡っていたにも関わらず、闊達な討議が展開されました。

シンポジウム後には、弘前大学生協同組合で懇親会を開催し、津軽の地酒と地場産物を味わいながら、会員相互の交流を深めていた模様です。

最終日には、個別報告が行われ、4会場で30件数の発表が行われ、若手をはじめ、中堅・ベテランと世代を超えた会員による活発な議論が交わされていました。

両日とも多くの方にご参集頂き、盛会のうちに大会を終えることができました（大会参加者118名）。会員の皆様のご支援、ご協力に感謝申し上げます。なお、今大会は青森県、弘前市、青森県農業協同組合中央会、青森県農業会議、青森県農業経営研究協会という複数の地方自治体および農業団体にご後援を賜りました。記して謝意を申し上げます。

青森大会事務局長 石塚哉史（弘前大学）

役員会・総会報告

青森大会の開催に併せて2016年8月25日（木）に役員会が、翌8月26日（金）に総会がそれぞれ開催されました。主な内容は次の通りです。

1. 2015/16年度の活動について

（1）会員数の動向

2016年7月31日現在 個人会員218名

（うち一般会員200名、学生会員18名）

団体会員 3団体

（2）2014/15年度 事業報告

2015年

9月 会員名簿発行

11月 農村経済研究 第33巻第1号（岩手大会＋論文）発行

12月 農村経済研究 第33巻第2号（50周年記念事業特集）発行

ニュースレター2015年秋号発行

2016年

2月 2015/16年度 第1回常務理事会開催（東北大学農学部、27日）

5月 ニュースレター2016年春号発行

2015/16年度 学会賞候補者募集

2016/17年度 研究助成募集

7月 農村経済研究 第34巻第1号（新潟大会特集号）発行

8月 2015/16年度 第2回常務理事会開催（東北大学農学部、4日）

第52回 青森大会開催（弘前市、26-27日）

2. 2015/16年度学会賞の選考について

次ページの記事をご覧ください。

3. 2016/17年度研究助成対象者選考結果について

残念ながら今回は応募がありませんでした。

4. 4～7月入会者の初年度会費免除について

入会者を増やすため、4月1日から7月31日の間に入会した会員の初年度会費は免除し、翌会計年度会費から納付していただくこととしました。

5. 研究助成規定の改正について

より応募者を増やすため、主として以下の改正を行いました。

- ・ 研究助成事業への応募資格を、募集年度の4月1日で会員であることから申請時点で会員であることへ変更。
- ・ 研究代表者が大学院生の場合は、指導研究者を置くことを追加。

6. 2016/17年度事業計画について

以下の内容で承認されました。

- ・ 農村経済研究発行
 - 第34巻第2号（論文特集）
 - 第35巻第1号（弘前大会特集）
 - 第35巻第2号（論文特集）
- ・ 山形大会プレ・シンポジウム（企画担当副会長と山形県選出理事と相談の上、必要に応じて開催）
- ・ 第53回山形大会開催
- ・ 2016/17年度 学会賞表彰
- ・ 2017/18年度 研究助成
- ・ ニュースレター発行（2016年10月下旬、2017年5月中旬＝山形大会案内を同封）
- ・ 常務理事会開催（2017年2～3月、2017年7月下旬～8月上旬）
- ・ 英語論文の執筆要領整備検討
- ・ J-STAGE への論文搭載
- ・ 業務マニュアル作成に向けた検討
- ・ 2016/17年度大会（2017年夏）は山形県で開催されることが承認されました。

7. 役員改選について

総会において新理事が承認され、新理事会において会長に小沢互会員が選出されました。その後、会長から副会長、担当理事及び会長指名理事が任命されました。任期は2016年9月1日から2018年8月31日までです。

◆会長：小沢 互（山形大学）

◆副会長：角田毅（山形大学）、津田渉（秋田県立大学）、宮路広武（東北農業研究センター）

◆理事：石塚哉史（弘前大学）、泉谷眞実（弘前大学）、佐藤和憲（岩手大学）、新田義修（岩手県立大学）、大和田祥代（宮城県農林水産部）、川島滋和（学会誌編集担当、宮城大学）、水木麻人（事務局・会計担当、東北大学）、中村勝則（庶務担当、秋田県立大学）、須藤英弥（山形県農林水産部）、仁井智己（福島県農業総合センター）、小山良太（福島大学）、伊藤亮司（新潟大学）、清野誠喜（新潟大学）、塩谷幸治（中央農研北陸研究センター）、磯島昭代（東北農業研究センター）、小野雅之（神戸大学）、椿 真一（愛媛大学）、宮入 隆（北海学園大学）、福田竜一（農林水産政策研究所）、高橋太一（会長指名・学会賞事務担当、東北農業研究センター）、渡部岳陽（会長指名・学会誌編集担当、秋田県立大学）、吉仲 怜（会長指名・電子ジャーナル担当、弘前大学）、小山田普（会長指名・広報・ホームページ担当、東北大学）

◆監事：木谷忍（東北大学）、柘植徳雄（東北大学）

◆評議員：成田勝治（青森県産業技術センター農林水産総合研究所）、成田高（青森県農協中央会）、小野正人（青森県農林水産部）、及川浩一（岩手県農業研究センター）、大川 隆（岩手県農協中央会）、菊池政洋（岩手県農林水産部）、竹中智夫（宮城県農協中央会）、江畑正徳（宮城県農林水産部）、松井章房（農林水産省東北農政局）、鈴木 剛（秋田県農協中央会）、齋藤 了（秋田県農林水産部）、後藤雅喜（山形県農協中央会）、工藤郁也（山形県農林水産部）、伊藤祐幸（山形県農林水産部）、川上雅則（福島県農協中央会）、井上久雄（福島県農業総合センター）、芳見 茂（福島県農林水産部）、小林 巧（新潟県農林水産部）、高橋一成（新潟県農協中央会）

◆顧問：松尾 元（農林水産省東北農政局）

2015/16 年度学会賞

2015/16 年度東北農業経済学会賞（木下賞）奨励賞および学会誌賞は、以下のように決定しました。残念ながら学術賞および実践賞は該当者はありませんでした。

受賞理由は以下のとおりです。青森大会にて開催された総会において表彰式が行われました。

1. 奨励賞

◆受賞者

安江紘幸（農研機構東北農業研究センター）

◆受賞対象

「東北農業における技術普及研究とその研究成果を通じた実践活動による復興支援」

◆受賞理由

農業の発展に寄与してきた協同農業普及事業に関して、普及事業制度の変革や農業の担い手の変化の中で、今後の普及事業のあり方について分析、提言を行っている。分析に際しては、普及事業の公共性に着目して新たな分析の枠組み、視点を示している他、今後の普及事業のあり方についても、多様なアクターとの連携の必要性など具体的な提言も行っている。また、公共性の視点からビジネスモデルの成立条件について分析し、地域農業の発展方策も示している。

さらに、岩手県津波被災地での農業復興に対する取り組みにおいては生産者や普及組織と連携して、研究成果の社会実装に向け実践的に取り組んでおり、この点も研究業績同様に評価できる点である。

今後の研究の進展により、普及活動の改善や生産現場の課題解決など、東北農業の発展に寄与する、より具体的な研究成果の提示も期待される。

さらなる研究の蓄積と成果の公表が待たれる部分もあるが、将来の発展が期待される会員の研究業績として、奨励賞受賞に相応しいものである。

2. 学会誌賞

◆受賞者

小山田晋（山形大学）・長谷部正（東北大学）・平口嘉典（女子栄養大学）

◆受賞論文

「変容する地域社会における黒川能維持の方向性—質的データを用いた黒川能維持モデルの構成—」（第33巻第1号）

◆受賞理由

本論文は地域伝統文化の維持を地域社会の持続可能性に関連づけ、維持を地域住民らの意識や試みの総体を住民へのヒアリングデータからモデル化し、一つの方向性を示している。社会学の手法であるGTAを用いて作成した「黒川能維持モデル」を作成し、これまで黒川能の維持で機能してきた「習慣重視思考」は今後衰える可能性があるものの、「伝統」という意味づけが住民間で広く共有されていること、「神事」という意味づけはイターン者に共有されることを示し、さらに近年の上演では行政、女性、観客の役割が拡大し、これらの主体を黒川能維持の方向にどのように束ねていくかが課題であることを指摘した優れた論文と評価した。

◆受賞者

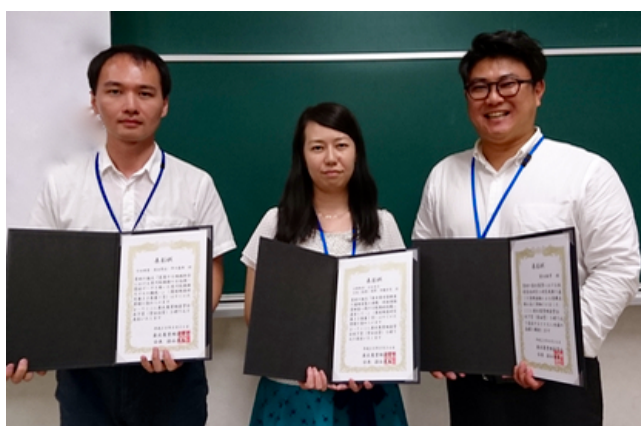
小松知未（福島大学）・小山良太（福島大学）・小池（相原）晴伴（酪農学園大学）・伊藤亮司（新潟大学）

◆受賞論文

「米全量全袋検査の運用実態と課題ー放射性物質検査に関する制度的問題に着目してー」（第33巻第1号）

◆受賞理由

本論文は、福島県における米全量全袋検査の運用実態と検査結果を詳細に整理し、制度上の位置づけとその問題点を示している。問題点として検査は福島県のみでの判断で計画に組み込まれているため基準値超の発見とその後の迅速な対応が困難であることが示されている。そこで、国レベル及び県レベルのデータを総合的に判断して、米全量全袋検査の実施エリアを指示する枠組みを構築すべきことを指摘した優れた論文と評価した。



小山田会員

小松会員

安江会員

受賞者のことば

◆奨励賞

この度は、東北農業経済学会木下賞（奨励賞）を賜りましたこと大変光栄に思います。この場をお借りして、論文執筆にあたりお世話になりました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。私は、2013年6月に東北大学へ着任以降、学生時代に住み込み調査を行った東北の地を中心に、農業・農村が活性化するための研究活動を続けております。主たる研究は、農業の生産現場で最前線に立つ普及員および協同農業普及事業の公共性を再評価し、新たな意義付けを行うことです。もうひとつは、津波被災地域を対象に、農村で生活する農家目線で農業による復興方途を見いだすことです。なお、今回は、新たな研究領域の開拓という未来の私への期待を込めて受賞に至ったと認識しております。このようなご期待に応えられるよう更なる研究の深化とともに、東北農業・農村の課題解決に貢献できる

実践的な研究に取り組んでいく所存でございますので、今後ともご指導のほど宜しくお願い致します。

安江紘幸（東北農業研究センター）

◆学会誌賞

このたびは名誉ある東北農業経済学会木下賞（学会誌賞）を賜り、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。受賞論文では、福島県が実施している玄米の放射性物質の全量全袋検査について論じました。この検査については、食品リスク管理や費用対効果の捉え方の観点からいくつかの議論がなされています。しかし、国の制度として曖昧な位置づけしか得られていないこと、東京電力の損害賠償請求を原資に制度を運用している実態についてはほとんど認知されておりません。このような現状を踏まえ、農業経済学分野から、制度的な位置づけ・運用実態・課題を考察し公表することの重要性を強く感じ、研究に取り組みました。議論の土台を整理したにすぎませんが、受賞を契機に、より効果的な放射性物質対策についての学際的な議論が深まることを期待しております。これからも精進して参りますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

小松知未・小山良太（福島大学）

小池（相原）晴伴（酪農学園大学）

伊藤亮司（新潟大学）

このたびは学会誌賞を賜り厚く御礼申し上げます。受賞対象の論文で取り上げた黒川能は、山形県庄内地方旧黒川村で550年もの間受け継がれてきた「農民芸術」です。民俗芸能研究を農業経済学の学会で報告することの場違いさは十分自覚していただけに、本学会での受賞は予想外のことでした。この論文を書いていたころは柳田國男に少し興味があり、農業経済学と民俗学の境目に位置するような研究ができないかとぼんやり考えていました。黒川能に取り組む人びとは、農村社会が近代化し昔と変わってしまったことを事実として受けとめ順応しつつも、大変な負担をやりくりして能を続けることに喜びも感じているようでした。そんな経済と文化の営みの微妙なバランスを多少なりとも表現できないかとまとめたのが今回の論文です。とはいえまだまだ一歩先も見通せない未熟な研究でもあります。本賞の名に恥じないように研究を続けていきたいと思ひます。

小山田 普（東北大学大学院）

学会長を退任するにあたっての所感

学会長を二期4年つとめ、先の青森大会にてその任を終えることが出来ほっとしたというのが実感です。東日

本大震災に対応したシンポジウム、そして学会 50 周年という節目の行事などの時期に学会長でいられたことは自分なりにはやりがいのある仕事でありました。それらの事業に際し会員の皆さんや理事をはじめ役員の方には大変お世話になったことに對し改めて御礼申し上げます。

会長の立場にいて感じたことのいくつかを記しておきます。まず学会がスムーズに運営されていることに関してです。スムーズな運営は裏方に徹した会員の奮闘によるものです。学会誌の編集から印刷・製本・発送まで如何に多くの労力と時間がかかっているのか、また庶務関係の仕事無しには学会自体が動かないことを詳しく知ることが出来ました。手弁当でそれらの活動が行われていることを学会員全体が認識して欲しいと思いました。その費やす労働を感じられたことは会長になったことによる収穫と思っています。

いささか話題は変わります。それは日本の農業経済学会と政府との立ち位置です。大げさな言い方で恐縮です。日本農業経済学会の最終日に農業経済関係学会長会議が設定されています。確か神戸大学大会ですが、そこで話題になったことは農林水産省幹部と日本農業経済学会三役との意見交換の場の設定についてでした。これまで日本農業経済学会の三役と農林水産省の幹部との意見交換の場は設定されていないこと、今回そうした場を設定するにあたって東大農経出身の某氏が上の方に出世したのでその人にどのように進めた方が良い相談してみると言うことでした。日本農業経済学会という日本を代表する農業経済学会と農林水産省幹部との交流がないと言うこと(個人的あるいは政府の審議会関係では交流はあるでしょうが学会という立場として)、またその可能性を打診するために知り合いを介してでしか対応できないことです。うがった見方をするならば、東大法学部出身者に牛耳られている官僚組織にとって、たとえ日本を代表する日本農業経済学会であっても学会として交流する意味が少ない、あるいはないと見ているのだと推察しました。農林水産省幹部は農業経済学者のことなどあてにしていなかったと感じたのです。

最後に当学会の学会誌名の件です。このことについて神田先生が 33 巻 2 号に会誌名の変更の経緯について寄稿されています。神田先生の説明文ではいくつかの和名候補を選択したとあります。それらの中から現学会誌名の『農村経済研究』となったと記述されていますがポイントは学会誌名を 1 つに絞ったのは誰が会長の時かです。その点について神田会長の時であったようなニュアンスで書かれていますが、必ずしもはっきりは書かれていません。しかし『農村経済研究』という学会誌名となったのは青柳会長の時でした。青柳会長の時の理事会で、その名前になった決め手は以下の点にあったので

す。「東北大学に留学していた留学生が前の所属大学に博士論文を提出したときにあなたの研究分野は文化人類学だが、農業経済学の学会誌に論文を出しているのはおかしいと指摘されたことがあった。東北農業経済学会は経済学、社会学を分けてないので、今後このような幅広い分野の学生が入会できるように農村という名前に付けた方が良い」との意見に大方の理事が賛同したのでした。それを受けて青柳会長が現名にしようと提案し決定したのでした。

渋谷長生 (弘前大学)

論文投稿のご案内

編集委員会では、多くの会員の皆さんからの論文投稿をお待ちしています。原稿は和文・英文どちらでも結構です。分量は和文で最大 22,000 字 (印刷頁数で 12 頁) が目安です。詳細については学会ホームページの「会則・規程」の『農村経済研究』投稿規程をご覧ください。なお投稿規定は 2014 年 8 月 21 日より改訂されておりますのでご留意下さい。投稿先、問い合わせ先は以下の通りです。

東北農業経済学会『農村経済研究』

編集担当理事 川島 滋和 あて

宮城大学食産業学部

〒982-0215 宮城県仙台市太白区旗立 2 丁目 2-1

TEL 022-245-1257 FAX 022-245-1534

E-mail kawashim@myu.ac.jp

編集後記

◆NHK の『漫勉』という番組を見ました。漫画家が作品を描く現場を固定カメラで撮影し、その映像を見ながら、被写体本人と、番組企画者である人気漫画家の浦沢直樹さんとが語り合うというもの。漫画が出来ていく様子も面白いのですが、2 人がコマ割りや視点の高さなど悩んだポイントに共感したり、細部の書き込みに思い切ってボールペンを使うなどの工夫を吸収したりしているのが印象的でした。◆研究論文も普段目にできるのは、完成された文章や図表のみですが、そこにたどり着くまでには様々な悩み、試行錯誤があると思います。そういったことを語り合う企画があっても面白いかなと思いました。◆本学会も新体制がスタートしました。2 年間よろしくお祈いします。◆次号 2017 年春号は来年 5 月ごろの発行予定です。(N)

■ ■ 会員のよこがお ■ ■



林 芙俊さん

はやし ふとし

秋田県立大学生物資源科学部
助教

北海道札幌市生まれ。北海道大学大学院農学研究院博士後期課程修了。
2009 年より帯広畜産大学ポスドク研究員、2013 年より現職。

このコーナーでは、研究から一步離れて、会員のひとりにアプローチします。今回は、とある精通筋から「文具と日本酒にこだわりを持つ若手研究者が秋田にいる」との情報を得て、秋田県立大学の林芙俊さんにご登場いただきました。

——こんにちは。今日は林さんが普段使っているこだわりの文具を持ってきたいただきました。

実はもっとマニアックな物もあるんですが、一般的におすすめできるものを選んできました。

——いろいろありますね。このノートはなんでしょう？
一見普通のノートのように見えますが。

これは、半分に折って使えるリングノートの良さと、リングから外せるルーズリーフの良さを併せ持つノートです。

——リングから外せると何がいいんですか？

スキャナーで連続読み取りさせられることです。過去の資料を探すのって結構大変ですよね。ファイル名に調査対象とか日時、キーワードつけて保管しておけば、後で検索しやすいんですね。

——なるほど！調査メモをテキストで入力しなきゃと思うと大変ですが、これならもっと気楽にできそうですね。ノートの右隣にあるのはステープラーですね。その上にあるペンチのようなものは何でしょう？

ステープラー外しです。これも綴じてある資料をスキャナーにかけるときに重宝します。ステープラーは一見普通のように見えますが、槌子の原理が組み込まれていて、少ない力で 20 枚位いけちゃいます。

——スキャンしまくりってわけですね。それから、軟膏みたいな丸い容器に入っているのは・・・

紙をめくるときに指につけるすべり止めクリームです。僕は唾をつけてめくるのは絶対いやなんです。かといって指サックだと中が蒸れるし。それでこのクリームにたどり着きました。授業で資料を配るときとか、統計書をめくりながらデータ入力するときとか便利です。

——ほほー。そんなクリームがあるとは知りませんでした。最近、手の潤いがなくなってきて、ますます紙がめ

くりにくくなってきたんですね。なので、わざと研究発表など緊張する場面を想像して、手に汗をかかせていました。このクリームがあれば解決ですね。

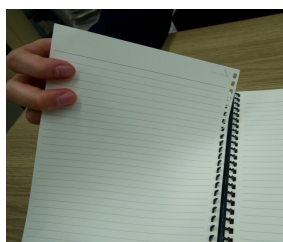
ところで、林さんは日本酒好きと聞いています。調査のついでに地元の酒蔵なんかに足を伸ばしたりもするんじゃないですか？

たしかに大学院生のころは行っていました。今は、卒論指導がきっかけで、酒造好適米の研究に取り組んでいるんですが、それで酒蔵が調査対象になることもあります。酒が好きだから、というよりも純粋に農産物流通論として面白いと思っています。調査のついでに行くとすれば、神社ですかね。賽銭をなげて、良い研究になることを願っています。ほんとにそんな邪な気持ちで拝んじゃだめなんでしょうけど。

——私はもっぱら健康祈願です。参拝者の気持ちまでスキャンされちゃうのでしょうか（笑）。酒造好適米の研究、面白そうですね。ぜひ農村経済研究への投稿もよろしくお願いします。ありがとうございました。



林さんこだわりの仕事道具・セレクト4



リングから外しスキャン



紙めくり専用クリーム

■主な業績

林芙俊「畑地型酪農における規模拡大とふん尿処理費用の関係ー北海道十勝地域を対象としてー」、『2013 年度日本農業経済学会論文集』2014。

林芙俊「加工・業務用青果物流通に対する取引費用論の適用可能性」秋田県立大学 Web ジャーナル (https://akita-pu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=652) 2016。

(聞き手 秋田県立大学 中村勝則)